

最優秀賞

<全道大会奨励賞受賞>

「あつかったら ぬげばいい」 —絵本が教えてくれたこと

長沼町立長沼中学校 3年 ^{たに}谷 ^{かずみ}和珠



「私は、独りぼっちじゃない。」
そう思えたのは、最近の出来事でした。
これまで私は、悩んでばかりいました。
特に友人関係にはいつも気を遣ってきまし

た。
ささいなことで、友達とうまくいけなくなり、お互い陰口を言い合ったり、裏切られたり。自分を信じてくれる友達は誰なのか、誰を信じればいいのか、先の見えない暗闇の中にいるようでした。家庭でも、自分の思いを聞き入れてくれないことや、細かなことまで注意されることで、両親とぶつかることが多くなりました。何事もうまくいかず、辛い毎日に押しつぶされそうになりました。なぜ、私ばかり悪者にされるのか。なぜ、誰も私をわかってくれないのか。私は孤独でした。

ある日のこと、父が一冊の絵本を薦めてくれました。中学生の私は、なぜ今更絵本なのかと、最初は否定的に考えていました。仕方なく絵本を開き読み進めていくうちに、絵本に夢中になっている自分がいました。

「ひとのふこうをねがっちゃったらなみうちぎわにかけばいい」

「つかれているのかどうかよくわからなくなったらつかれたことにすればいい」
かわいいイラストに、単純な一文が添えられた絵本でした。読み終えた私は、肩の力がすっと抜けていくようでした。嫌なことも我慢せずに、時には吐き出せばいい。自分にもっと素直になればいい。言われるまま、今思っている嫌なことを、紙に書いてゴミ箱に捨ててみました。母と喧嘩した後は、疲れたことにして寝てみました。気がつくと、この絵本に、今の自分を認めてもらえたようで、嬉しくなりました。

父は、私が大きなストレスを感じていることに、気が付いていたのでしょう。父は、絵本を通して私に手を差し伸べてくれたのです。言葉に表さない父の優しさを受け取った

ようでした。

この絵本をきっかけに、私の心に明かりが灯ったような気がしました。

私は独りぼっちではなかったのです。誰も私のことを理解してくれないというのは、私の誤解でした。親は私のことを見てくれたのです。絵本の言葉も私を励ましてくれました。

すると、だんだん気持ちが楽になり、ゆとりが出てきました。

『あつかったらぬげばいい』

当たり前のことを素直に受け止めて、難しく考えずに、前に進んでみればよかったです。

「私は、私らしく生きていけばいい。」
そう思えるようになると、細かなことにいちいち腹を立ててきた自分の幼さが、恥ずかしくなりました。

私が悩んでいたとき、親も同じように私との接し方に悩み、それで絵本に思いを託し、伝えてくれたのかもしれない。

どうして私ばかりが、と自分の殻に閉じこもる私を救ってくれたのは、自分は独りではないと感じることでした。独りで苦しみ続けるのをやめて、ゆっくりと呼吸を試みたら、世界の広さや私と繋がるたくさんの人の存在あたたかさに気づくことができたのです。

このコロナ禍の中、私たちの間には埋めきれない距離と時間が出来てしまいました。

孤独を感じ、不安も増しています。でも、こんな今だからこそ、お互いの心と向き合い、心をつなげることが必要です。お互いの弱さを認め合い、手を取り合うことで、私たちの心は強くなれるのです。前に進むきっかけは、どこにでもあるのです。私にとっては父からもらった絵本であったように。

だからこそ、気づいてほしいのです。私たちは独りではないことを。私たちは強く生きていけることを。